日本忍法伝

第23回

作・佐々木守
え・岡本颯子

第19章
蝦夷の霧

（一）

「蝦夷だ！」

叫び声が森にこだました。

黒いひげ、濃いまゆ、そして長い髪。一様に目を光らせた男たちは、まるでまぼろしの如く原生林の中から姿をあらわすと、一斉に手にした弓に矢をつがえた。

「蝦夷だ！」

万事休すか。一瞬弓月は唇をかんだ。

この道を北へにげれば、いつかは蝦夷に出会うことはわかっていた。しかし、その時は出雲族の苦難をうったえつつ、蝦夷をも含んで共に、騎馬民族の大和朝廷と闘うべく、いわば連合戦線を組むつもりだったのだ。

それがいま、ここで、こんな時に蝦夷の先鋒隊と出会おうとは思わなかった。

すでに、後方からはどどっと迫る能登軍団の馬蹄が不気味にひびいてくるのだ。

玉櫛の腕に抱かれた赤ん坊が、けたたましく泣きはじめた。

その時、不思議なことが起こった。蝦夷軍の先頭に立っていた背の高い男が、一きわ高い声で何ごとかさけんだかと思うと、蝦夷の一団は、さざあーっと灌木のしげみをゆるがして、出雲族のわきを走りぬけようとしたのである。

出雲族の女、子どもの中から悲鳴が起こった。側面からの一斉攻撃と思えたからだ。

が、蝦夷の目的は別にあった。

彼らは、出雲族には目もくれず、ざーあっと一散にそのわきをはしりぬけていくではないか。

あきらかに、彼らは能登軍団をねらっているものとうけとれた。

「伏せろ」

弓月はさけんだ。

出雲族の一団は、岩の上に、木のかげにすばやく身をふせた。

一瞬、ピッ、ピッ、ピッ、蝦夷の小さな弓から、矢が原生林のすき間を縫ってとんだ。

「わあーっ」

「ぎあーっ」

叫びは、出雲族の後方からわきおこった。

能登軍団の先頭のものが、矢にうたれたのである。

たちまち、能登軍団は混乱した。わけても馬上のたたかいにはなれてはいたが、原始林の斜面では、彼らはいやおうなしに馬を捨てなければならなかった。そして生いしげるつたや灌木――。

しかし、もともとそこに住みなれ、そこを生活の場としている蝦夷一族にとって、ここは特別のところでも何でもなかった。原始林の太い木々の間を、まるで猿のようにすばしっこく、あの大きな男たちが、チラチラとかけまわり、つたを使ってとび、前後左右から能登軍団に矢を射かけた。

能登軍団は、しかし、白布の叱陀の中で、刀をぬいて走った。なれぬ山道をころびながら、能登軍団は走る。あきらかに彼らは、一人で一人を殺すという戦法をとっているにちがいなかった。

その時、弓月は見た。白布が、剣をぬいて草の間をするすると進んでくるのを。白布の目的は、蝦夷の指揮をとっていると思われるあの背の高い男にあることは、うたがいなかった。

「危い！」

つぎの瞬間、弓月はよこっとびにとぶと、一気に木の上へのぼり、そこから、矢の如き勢いで、白布の上へとびおりた。

「弓月か！」

ハッととびのきざま、白布の剣は弓月へむかった。

「こい、白布」

弓月も剣をぬいた。

蝦夷の男ははっとして弓月をみた。そして弓月の行動が、自分を救うためであったことを一瞬にさとったようであった。

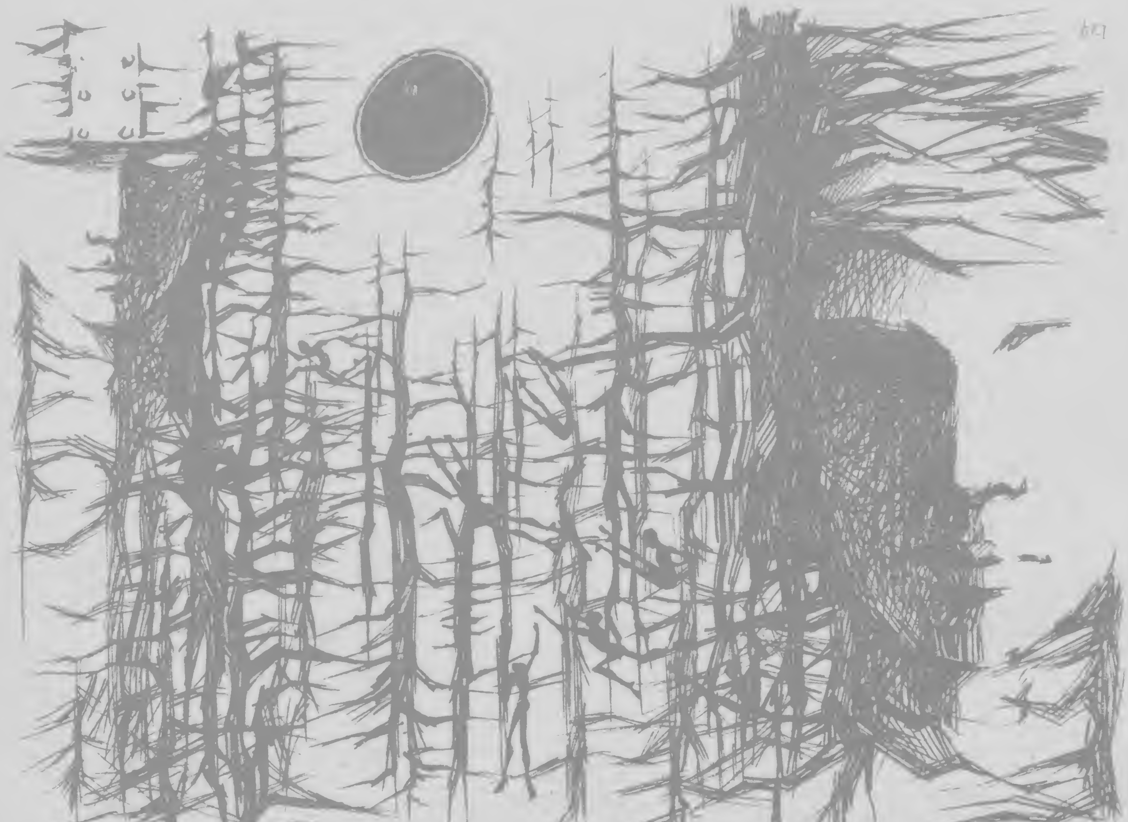
ガンッ！

白布がとびこんだ。その剣を弓月は自らの剣でうけると、次の瞬間、満身の力ではねかえす。さっと白布が向こうへとび、くるりと一回転してこちらを向きなおる。

このころ、剣は斬るよりも、むしろ突くことを目的として使用されていた。

白布の剣は、水平に切っ先を弓月にむけている。キラリ、とその細い先が光った。

と、とつぜん、蝦夷の男が、奇妙な叫び声をあげた。その声にこたえるかのように、森のあちこちで、同じような声があがった。



そして弓月はみた。
白い霧が、みるみる原始林の木の間をはう如く、しかし勢いは怒濤の如く、自分のまわりにおしよせてくるのを。
白布も、はっとしたようであった。
「弓月、貴様！」
白布はさけんだ。が、その白布の姿も、いまは、白い霧の中にぼんやりとしか見えなくなり、そして、それはすぐにかきけすごとくきえてしまった。
そのあとは、ただ、霧、霧、霧。
音もなく、白い霧は、いよいよその濃さをましながら、はてしない原始林を、いまやまったくつつみこんでしまったかに見えた。その中で、弓月はぼう然と立っていた。
これは果たして如何なる理由によるものか。
単に、自然のなせるわざと考えるにしてはあまりにこちらに都合よすぎるのではないか。そう思いつつ弓月は、さっきあの蝦夷の男が叫んだ不思議な声を思いおこした。
あの声と同時に、林のあちこちで答える声がした。とすぐにこの霧がおしよせたのではなかったか。とすれば、この霧は、あの蝦夷の男たちが――。
その弓月は、いまガッシリとした手が自分の肩をつかんだのを知る。
「こちらへ」
肩をつかんだ手がそういった。
二、三歩ふみだして弓月はきく。
「しかし、おれの仲間たちは――」
「大丈夫。わしの手下たちが、無事に案内しているはずだ」
姿は、濃い霧にかくれてさだかではなかった。しかし、弓月はその声の主が、あの蝦夷の背の高い男であろうことを何故か確信していた。

（二）

ほだ火がチロチロと燃えた。
それは一カ所、二カ所にとどまらず、原始林のあちこちに十カ所も、二十カ所もたき火がたかれていた。
遠くからみると、それは、暗い原始林にかがやく星の如く見えた。
出雲族の老若男女は、はじめてあたたかい火のまわりで、くつろいでいた。
蝦夷の男たちは、けものの肉を出してくれた。蝦夷の女と出雲族の女は、共にその肉をたき火であぶった。
玉櫛も、木の技に肉片をさしながら、一本一本あぶっていった。蝦夷の女がそばでほおえんだ。玉櫛もほおえみをかえした。その蝦夷の女の口のまわりは、青いいれずみでくまどられていた。一見、こわそうに見えるこの女と、出雲族の玉櫛とは、しかし料理をするときは同じ女であった。そのことが、二人の間にほおえみを交わさせたのである。
「おれが、お前たちを助ける気になったのは」と蝦夷の背の高い男がいった。男はワッカだと名のった。ワッカはつづける。「わしがお前たちを助けようと思ったのは、あれを見たからよ」
ワッカは一方を指さす。
そこのたき火には、長老たちがあつまって獣の肉をほおばっていた。
そして、そのかたわらには、いまはたった一つだけとなった銅鐸が、たき火のあかりに光っているのであった。
「あれを？　銅鐸のことか？」
ワッカはうなずいた。
「そうだ」
「どうして、あれをみて？」

「昔、あれと同じものが、わしの部落にもあったことをおぼえている」

「えっ、銅鐸が蝦夷の部落に？」

「そうだ」

「そして、それは、今どうなったか」

「今はない。わしの子どもの頃だ。誰もあれは何なのか、何に使うものかわからなかった。そしていつの日にか、なくなってしまった。おそらく、じゃまになるので、捨てたか、鋳つぶして別のものにしてしまったのではないかな」

「鋳つぶした！」

弓月はおどろいた。今まで、遠い北国の異民族だとばかり思っていた蝦夷の部落に、どうして銅鐸があったのか。

銅鐸こそ、出雲族がその神をまつる祭器であり、実にこれあらばこそ出雲族が騎馬民族に出雲の地を追われることになったものではないか。

神長祭政にもとづくゆたかな国づくりにはげんでいた出雲族は、シャーマンを中心とした呪術信仰を持つ騎馬民族に、そのくにを追われたのは、いうまでもなく征服王朝としての大和朝廷が、そのシャーマニズムを人民支配の支柱にすえたからにほかならない。

シャーマンを中心とする呪術信仰にとって、いわば神長祭政を守りつづける民族は敵であった。その出雲族の祭の象徴がこの銅鐸なのであるが、いま、同じ銅鐸が蝦夷の部落にもあったという。それは果たして何を意味するのか。

ふかいつながりというか、ふしぎなえにしというべきか、一つの銅鐸をめぐる出雲族と蝦夷との奇怪なむすびつきに、弓月が歴史の重さをしみじみと感じている頃、食事をおわった長老たちのたき火のまわりには、ぞくぞくと出雲族の人たちが集まって来ていた。

そこには、立ちがれた欅の大木が、ほとんど枝もなく、巨大な白い柱の如くなって、夜空を天へむかってのびていた。

長老は、銅鐸をしずかにその木の根もとにそなえた。

出雲族の人たちは、そっとひざまずいた。やがてその口からは、あのうたがもれはじめていた

八雲たつ

出雲、白雲

河にたつ



七重　地の雲
八重　天の雲
……………

そして、オオオン、オオオン、オオオン、銅鐸が北国の夜空にこだましてひびいた。

ものおもいにふける弓月は、その音に、はっとわれにかえった。

銅鐸よ、お前は、おれを、いったい、どこへみちびいていこうとするのか。

（三）

「出雲風土記」にはこうのべている。

出雲の神門郡の古志郷には、古くから「古志」の人たちが住んでいた、と——。謎はここにもある。なぜ出雲に「古志」という名の地名があるのか。「古志」とはいうまでもなく「越」である。「越の国」とは、いまものこる「越前」「越中」「越後」だ。そしていまひとつ奇妙なことばがある。それは「越蝦夷」ということばだ。とすれば、古典の伝承にあらわれる「コシビト」と「アイヌ」とは何か関係があったのだろうか。

更に一つこの謎を重ねよう。

それは出雲の神として有名な大国主命の、無二の協力者といわれた少彦名命（スクナヒコナノミコト）のことである。少彦名命はむかし、国語の教科書にもあらわれたりして、小人の神として、また知恵の神として、我々にはなじみの深い神であるが、この出雲建国に働いた少彦名命の別名が「クンの神」と呼ばれたという事実である。

「クンの神」すなわち「コシの神」であって「越人」をあらわすことはである。

とすれば、古来、出雲と越とは何らかの関係があった——その一つの証拠として「古事記」には次のような記事がある。



出雲の神大己貴命が、遠く「高志」の国に美（クワ）し女（メ）が有ると聞き、賢（サカ）し女（メ）があるときき、妻求（ツママ）ぎに出立し、ついに高志の沼河比売（ヌナガワヒメ）をめとって妃とし給うた——。

余談になるが、この大己貴命と沼河比売のロマンスは、松本清張氏の短篇「万葉翡翠」の中の、謎をとく有力なカギとして使用されている。

この記事をみても、出雲と越国ののつながりはあきらかである。しかも「丹後風土記」には、丹後の天の橋立は、もと「久志浜」と呼ばれたともいう。コシという名はかくて、出雲から越前、越中をとおり、越後へ、さらに出羽、津軽へとのびるのである。果たして「越蝦夷」とは何ものか。

（四）

オオオン、オオオン、銅鐸の音は、原始林の空気をふるわせてひびいた。ワッカを中心とする蝦夷の男女たちも、いつかこの音にひきよせられたように、じっと立ちすくんでいた。

「ワッカ」弓月が呼んだ。
「うむ」
「お前のワッカとはめずらしい名前だな。出雲にも、大和にも見あたらぬ、めずらしい名前だ」
「ハハハハ」ワッカは笑った。
「そうだろう。わしのワッカという名前はわしらどくとくのことばだ」
「どういう意味なんだ」
「湖だ。ワッカとはわしらのことばで湖という意味だ」
「湖？　このあたりに、美しい湖でもあるというのか」
「ワハハハ」またワッカは笑った。
「ここら辺にはない。しかし、ずっと北の海を越えた、わしらのふるさとには湖がある」
「お前たちのふるさと？」
「そうだ、オキクルミの神のつくったわしらのふるさとだ、そこには、大きな、美しい神の住む湖がいっぱいある」
そして、ワッカは、しみじみとした声でうたった。

イヤー、ヘーヘイ
イヤー、ホーホー
アラ　フイヤ　フイヤ
オー　フイヤ　ォー　フイヤ
…………

太く低いが澄んだ声だった。ワッカの声は銅鐸の妙なる音色と異なってひびいた。



（五）

みじめであった。白布を先頭に、約半分にへった能登軍団はとぼとぼと怒濤うちよせる日本海の波うちぎわを歩いていた。
ゆめのようであった。白布は、はじめて負けたことを、いましみじみとかみしめてみる。
くそっ！　弓月のやつ！　蝦夷の野蛮人め！　心の中で、いったい何度、そうつぶやいたことだろうか
しかし、これは、大和朝廷にとっては由々しき大事であることもまた、白布は知っていた。騎馬民族に反対する出雲が東北の蝦夷と組んだら、いったいどうなるか。
一刻も早くこの事態を中大兄皇子につげなければ――やっと白布の胸に使命感がわき上がった。いくぞ。かけにかけて、一散に大和の地までいくのだ。
ヒシリ！　馬にムチがあたった。
サッと能登軍団のボロボロな姿ははしりはじめた。南へ一直線！　そして白山土道をとおり、大和へ直行するのだ！

（つづく）